



クローズアップ飯盛城 2024 講演会

飯盛城を支えた お城を考える

飯盛城と
関連城郭

— 資料集 —

当日次第

| | | |
|------|------------------|--|
| 開 場 | 12:00 | |
| 開会挨拶 | 13:00～13:05 | 家村幸一（大東市産業・文化部生涯学習課長） |
| 報 告 | 13:05～13:55 | 『大東市域の支城 一野崎城跡・龍間城跡・三箇城跡一』 李 聖子（大東市） 『四條畷市域の支城 一田原城跡・千光寺跡一』 村上 始（四條畷市教育委員会） |
| 講 演 | 13:55～15:05 | 『北田原城跡の発掘調査成果』 江浦 洋氏（公益財団法人元興寺文化財研究所） |
| 休 憩 | 15:05～15:15（10分） | |
| 講 演 | 15:15～16:25 | 『飯盛城の支城群』 天野忠幸氏（天理大学教授） |
| 閉会挨拶 | 16:25～16:30 | 西岡 充（四條畷市教育委員会社会教育部文化財課長） |

凡 例

- 1) 本書は、大東市・四條畷市教育委員会・大東市立歴史民俗資料館・四條畷市立歴史民俗資料館が令和6年10月12日（土）に共同で開催するクローズアップ飯盛城跡2024講演会『飯盛城を支えたお城を考えるー飯盛城と関連城郭ー』（会場：大東市立市民会館2階 キラリエホール）の資料集である。
- 2) 「浅野文庫諸国古城之図（礪城）」、「浅野文庫諸国古城之図（砂・岡山御陣図）」の掲載にあたっては、広島市立中央図書館から許可をいただいた。
- 3) 「関連城郭と街道、旧深野池・新開池推定範囲」の作成にあたっては、吉田知史氏（交野市教育委員会）に協力をいただいた。

大東市域の支城 —野崎城跡・龍間城跡・三箇城跡—

李 聖子 (大東市)

はじめに

飯盛城跡は大阪府の北東部、四條畷市と大東市にまたがる飯盛山の山頂に築かれた中世の山城跡です。城域は東西 400 m、南北 700 m を測り西日本有数の規模を誇ります (28 頁 飯盛城跡赤色立体地図)。また、本格的な石垣が取り入れられた山城跡としても有名です。

飯盛城が機能していた当時、周囲には飯盛城を守るため多くの支城が築られました。支城の機能を有したとみられる城には、飯盛城の東を守る狼煙台としての機能が推定される南野砦、長谷遺跡 (四條畷市) の北西に存在した可能性のある権現山砦、西には深野池に存在した三箇の島に築かれた三箇城、東には大和への街道沿いを抑える田原城、北田原城 (生駒市)、南方を守る野崎城、龍間城、北方を守る忍岡古墳を城郭化した岡山城、土砂採取で消滅した清滝山に存在したとされる清滝城、現在は龍尾寺が建つ茶臼山砦が挙げられます。今回の講演会では、これらの飯盛城を支えるために築かれたお城=支城を取り上げます。

1. 大東市域の支城跡

大東市域にある支城跡は野崎城跡、龍間城跡、三箇城跡の三か所です。野崎城跡と龍間城跡は飯盛城跡の南方の山中に築かれていますが、三箇城跡のみ飯盛城跡の西にかつて存在した深野池の三箇の島に築かれていました。

野崎城跡は近年のハイキング道の整備により地形が改変されているものの、城郭遺構を確認することができます。龍間城跡は山中に良好な状態で城郭遺構が残されており、東側に位置する大阪桐蔭グラウンド建設工事の際に発見された出土遺物から城の性格を推定することができます。三箇城跡については文献から様子をうかがうことはできますが、残念ながら遺構が発見されていないため城跡の詳細な位置などは明らかになっていません。

2. 野崎城跡

飯盛城跡の南西方約 1 km、飯盛山から南西に伸びる尾根に位置する標高約 114 m の八幡山の山頂に築かれており、城域は東西約 200 m、南北約 220 m を測ります。赤色立体地図を見ると、北側には谷田川が西に向かって流下し、山頂に主郭に相当する曲輪 (写真 1) が築かれています。主郭の南東斜面下には堀切 (写真 2) が構えら



写真 1 野崎城跡 主郭 (南から)

れており、この堀切は飯盛山へ至るハイキングコース（南尾根コース）が通っています。主郭から北にのびる尾根 A と南にのびる尾根 B には削平はあまいものの、曲輪状の平坦面が確認できます。尾根 A と尾根 C の間の谷には帯曲輪が配されています。尾根 C と主尾根から北西方向にのびる尾根 D にも曲輪状の削平地を確認することができます（写真3）。

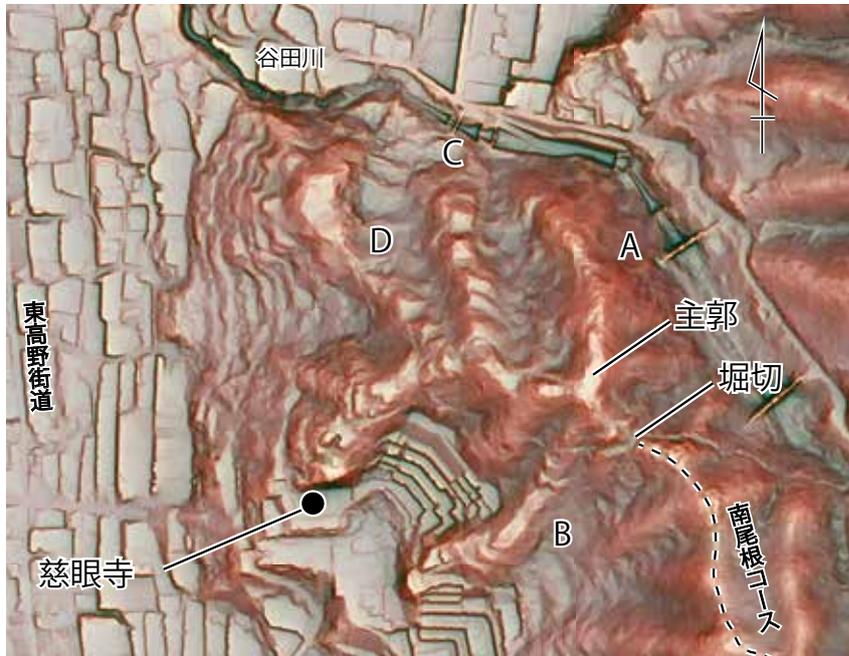


図1 野崎城跡 赤色立体地図 (1/2500)

主郭の西側の主尾根には階段状に曲輪が配置され、さらに西の慈眼寺（野崎観音）に向かって削平地が続きますが、平成17年に整備された休憩所やハイキング道の整備によって地形が大幅に改変されているため城郭遺構であったかはわかりません。

野崎城跡の遺構の配置を改めてみてみま

しょう。主郭の南東に堀切を構えて、この堀切より西の尾根 A と尾根 B にさらに曲輪を配置することで城より東側の侵入を防いでいると考えられます。また、尾根 A の曲輪は尾根 C、尾根 D と合わせて北側の谷筋沿いの侵入を防ぐ役割をも担っていたと推定されます。また主尾根の南西端には慈眼寺が東高野街道に面して位置しており、城と一体となって東高野街道と城の南側の防御を担っていた可能性が指摘できます。ただし、詳細な現地踏査を行っていないため、今後の調査によって城の構造を解明する必要があります。

野崎城の築城者や築城時期は明らかになっていませんが、文献からすくなくとも15世紀には成立していたと考えられます。現在、野崎城跡からは龍間城跡を通して飯盛城跡へ至るハイキングコースが通っています。このことから飯盛城が機能していた時代には野崎城は本城である飯盛城の南方防御の一拠点として機能していたと考えられます。



写真2 野崎城跡 堀切（北西から）



写真3 野崎城跡 尾根 B 曲輪状削平地（北東から）

3. 龍間城跡

飯盛城跡の南方約500mに位置する標高294mの山頂を中心に築かれており、城域は東西約50m、南北約80mを測ります。山頂に主郭に相当する曲輪を築き、そこを中心に放射状に曲輪を配置しています。曲輪は尾根上に構えられており、自然地形を利用して造成したものと考えられ、確認できる城郭遺構は曲輪と土塁のみです。土塁は主郭に築かれており、土塁が途切れる箇所は曲輪への出入口と考えられます。龍間城跡で発掘調査は行われていませんが、城跡の南東側山麓に位置する大阪桐蔭高等学校の野球グラウンドの造成時に行った発掘調査では、15～16世紀前半の土師器皿・羽釜・瓦質土器火鉢・瀬戸美濃焼の皿などの土器や陶磁器が出土しています。出土地点から龍間城跡までの間で城郭遺構は確認されなかったため、山麓に居館などの城郭関連施設があり、それに関連する資料と推定されます。



写真4 龍間城跡 主郭（南西から）

龍間城跡はその規模から在地土豪の城として、木沢長政が飯盛城を居城とした時期（天文5年[1536]～12年[1543]）に築かれ、飯盛城南方の拠点として機能していたと見られます。三好長慶が飯盛城に入城した永禄3年（1560）にも南方防衛の一拠点として再利用され、飯盛城が城郭としての機能を失う永禄12年（1569）頃に廃城となったと考えられます。

龍間城跡はその規模から在地土豪の城として、木沢長政が飯盛城を居城とした時期（天文5年[1536]～12年[1543]）に築かれ、飯盛城南方の拠点として機能していたと見られます。三好長慶が飯盛城に入城した永禄3年（1560）にも南方防衛の一拠点として再利用され、飯盛城が城郭としての機能を失う永禄12年（1569）頃に廃城となったと考えられます。



図2 龍間城跡 赤色立体地図 (1/2500)

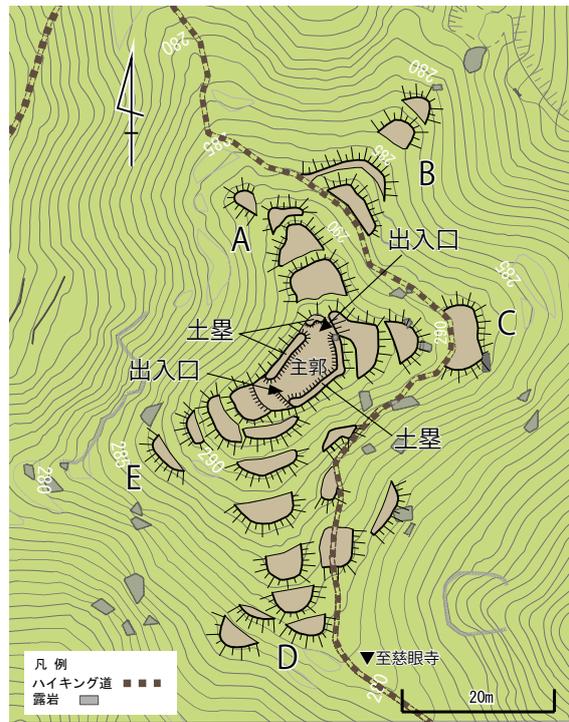


図3 龍間城跡 遺構図

4. 三箇城跡

飯盛城跡の西方約 2.5 km に三箇遺跡が位置しています。三好長慶に従った三箇頼照の城として文献に登場する三箇城ですが、詳細な位置や規模は不明です。現在、城が所在すると考えられる範囲は三箇遺跡として遺跡台帳に登録されています(図4)。

イエズス会宣教師ルイス・フロイスの『日本史』や残された書簡によると、三箇を治めていた三箇頼照は三好長慶に取立てられて飯盛城内に住居を構えていました。その前には『川沿いの堀に囲まれた小島』に家を有しており、これが三箇城にあたると考えられます。また、クリシタンであった頼照は島に教会を建設していたことも記されています。

現在の状況から島がどこにあったのか判断することはできず、三箇遺跡の中で行った発掘調査でも 16 世紀の遺物は発見されていません。三箇 3 丁目で行った道路工事に伴う発掘調査では近世の段状の遺構(写真5)が発見されたのみです。そこで、飯盛城が機能していた当時、三箇の島がどこにあったのか残された絵図と古地図から探してみたいと思います。

三箇の島は大和川付け替えによる新田開発で深野池が開発される前の絵図にその位置が示されています(図5・図6)。正保国絵図系であるとみられる「摂津河内国絵図」(図5)では、深野池の中に島が3島描かれており、中央の島が一番大きな島であることがわかります。元禄に描かれた「河内国絵図」(図6)を見てみると、深野池には10の島が形成され、中垣内越(古堤街道)が通る箇所にひととき大きな島が描かれ、三箇村の記述があります。この絵図からは、河川から深野池に流れ込む際に運ばれてくる土砂が様々な場所に堆積し、島を形成していることがわかります。また、両絵図とも島は池の西側に南北方向に多く形成されている様子が描かれています。これは南北から流れ込む河川が深野池の西端に集中しているため、このように島が形成されたものと考えられます。

「摂津河内国絵図」に描かれた村と街道、河川を明治20年に大日本帝国陸地測量部が作成した地図に記された地形や地名と照らし合わせて、深野池と新開池の一部のおおよその範囲を地図に転記しました(27頁 関連城郭と街道、旧深野池・新開池推定範囲)。そのうえで深野池の西側、島が形成されていた付近を確認すると、一番南側に「三箇村地」の記載があり、その北側には三箇村が位置しています(27頁)。一番北側の島の位置は地図から読み取る

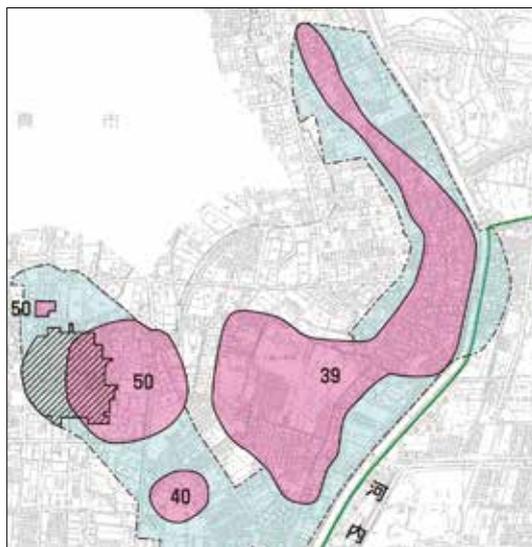


図4 39三箇遺跡(大東市埋蔵文化財分布図)



写真5 三箇遺跡 段状遺構(近世水田跡か)



図5 摂津河内国絵図 深野池部分
(国立国会図書館デジタルコレクションより)



図6 河内国絵図(元禄) 深野池部分
(国立公文書館デジタルアーカイブより)

ことはできません。地図に記載されている小字等は「河内国絵図」と合致する部分が多く近世の状況を反映しているとみられます。そのため中世の三箇の島の状況を読み取ることは困難です。また、二つの異なる時期に描かれた絵図を見比べてみても深野池に流れ込む土砂によって形成される島は時代によってさまざまに移り変わっていることから、時代によって村の中心が移動している可能性も考えられます。

現状では、発掘調査で三箇城に関する遺構や遺物は発見できていないため、まさに幻の城といえます。ただし、城跡は深野池の西岸に近くに形成された島に位置していると考えられるため、現在の三箇の集落の地下に埋もれている可能性が高いのではないのでしょうか。

おわりに

大東市域の支城を3つを紹介しました。野崎城跡と龍間城跡は山麓から本城である飯盛城跡へ至るルートに位置しています。飯盛城跡はⅧ郭(千畳敷郭)南側の虎口に至る尾根に堀切等の防御施設が確認できません。そのため、東高野街道から飯盛城跡の虎口に至るルートに野崎城・龍間城を配置し本城である飯盛城と一体となって南方の防備をになったとみられます。三箇城は考古学的な調査成果がなく、城の正確な位置や構造は明らかにはなっていません。しかし、水運の要衝であり、西側から飯盛城に侵入する際には必ず越えなければいけない深野池に位置することから西側の防衛ラインとして機能したのではないのでしょうか。いずれも本城である飯盛城の近くに築かれて本城の防御拠点として機能したと考えられます。

参考文献

大東市教育委員会・四條畷市教育委員会編『飯盛城跡総合調査報告書』(2020年)

大東市立歴史民俗資料館『三好長慶と大東市の中世』(2022年)

城郭談話会編『図解 近畿の城郭Ⅱ』(2015年)

四條畷市域の支城 —田原城跡・千光寺跡—

村上 始（四條畷市教育委員会）

1. 四條畷市域の支城

四條畷市は大阪府の北東部に位置し、市のほぼ中央を東西に連なる生駒山系をはさんで西側の平野部である西部地域と東側の盆地である田原地域に大きく分かれます。田原地域の東端は、北流する天野川を府県境として奈良県生駒市と接しています。

市内の支城跡は、田原地域の田原城跡、西部地域の岡山城跡、飯盛城の近隣に位置する清滝城跡、茶白山砦、権現山砦、南野砦があげられますが、すでに消滅しているものや城郭遺構が残存していないものなど、その多くは詳細が不明です。



2. 田原城跡と田原氏

田原城跡は、飯盛城跡から南西約 3.8 kmの上田原の八ノ坪に所在し、生駒山系から東へ広がる標高約 174 mの丘陵上の先端部分に立地します（写真 1）。

城の範囲は東西約 100m・南北約 90m、本郭（本丸）跡は南北約 26m・東西約 7m の削平地で、麓との比高差は約 20 mです。城の北西と南西側に堀を設け、周囲には北谷川と天野川が巡り城を守っていました。

城の北方には清滝街道、麓に古堤街道が通じる河内国と大和国を結ぶ要衝の地に築かれており、飯盛城の東方を防衛する支城でした。

この田原城跡が所在する八ノ坪には、城郭に関連する小字「城ノ下」・「土居の内」・「矢ノ石」があり、小字名以外には「門口、一の門、二の門、三の門、隠井戸」等の名称が伝承されています。小字「矢ノ石」は城の北側で、そこには「殿様が本丸から矢の的にした」と伝わる巨石が残っています（第 2 図）。



写真 1 田原城跡（南西から）平成 10 年

城の構造は、本郭の南西側に深い堀切を設けて本郭と二の郭とを区切っています（写真 2）。この堀切を北西方向に進むと井戸郭に至ります。この郭は窪地となっており、2 基の「隠井戸」と呼ばれる井戸が存在します。城の南西の周囲が急崖な地に西砦（現在は畑地）を、生駒山系と地続きの西側に裏山郭（現在は道路）を配置しています。また南側の谷間は現在宅地となっていますが、階段状の地形から当時の居住地の状況が伺えます。

田原城跡については昭和 57 年度から 3 回の発掘調査を実施しています。その結果、この城から西方の飯盛城跡方向へ続く丘陵の北西と南西側に谷筋を利用した深い堀を設けています（写真 3）。また、南西側の堀を挟んだ「殿様屋敷」と伝承されている丘陵の発掘調査では、直径 1.6 m・深さ 7.2 m の石組井戸（写真 4）と掘立柱建物跡を確認しています。これらの調査から築城時期は 14 世紀中頃と考えています。



写真 2 本郭と二の郭を区切る堀切

城主に関しては、口伝の他に天保十五年（1845）の『上田原差出明細帳』に「一古城跡 字城山 老ヶ所 但シ凡弍百年以前永禄之頃当地守護田原対馬守様御城跡と申伝候」と、貞享元年（1684）頃の『高橋孫兵衛家先祖書』に「高橋孫之進重友 妻ハ田原城主 何某之娘 民間ニ入郷士ト相成 文禄年中」と記された文献があります。しかし田原城を築いた人物については不明です。ただし、明治維新の際に廃寺となった真言宗千光寺に代わり法灯を継承し、現在墓地を管理している禅宗月泉寺には、江戸期以前の位牌が現存しています。それらのうち最も古いものは、延元元年（1336）銘であることから、鎌倉時代頃からの国人領主と考えています。

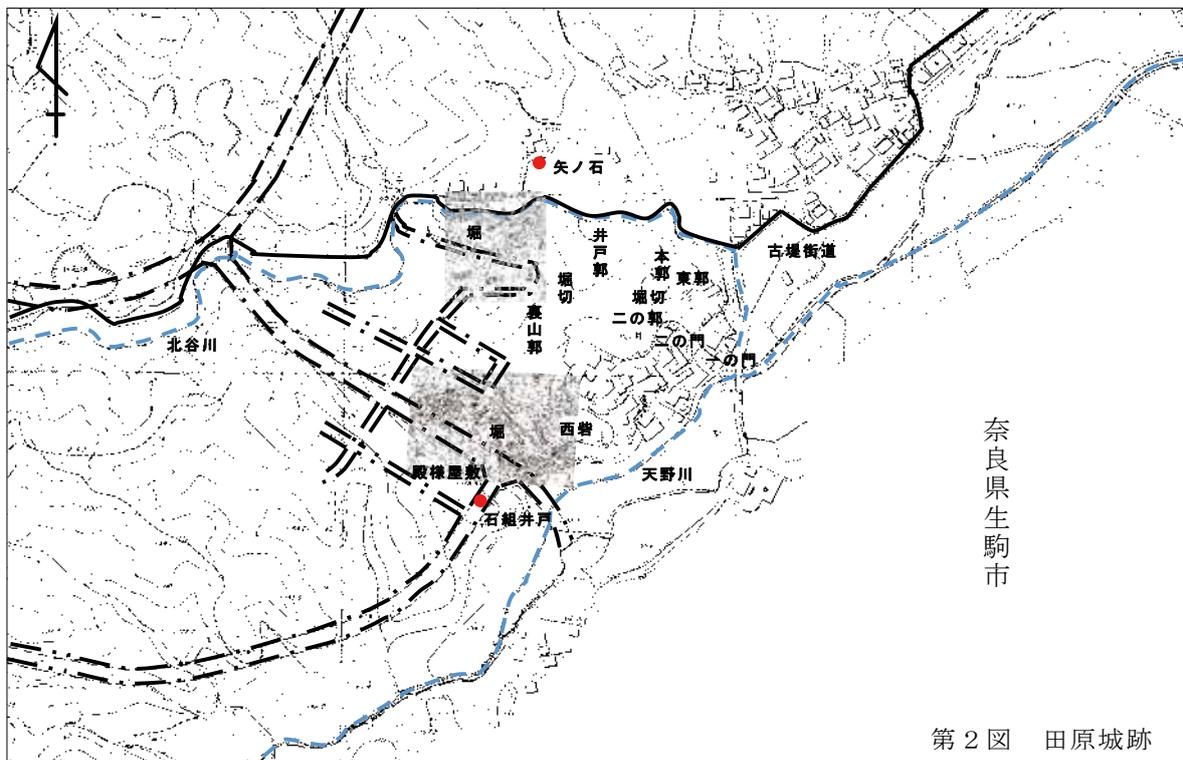
田原城は、現在の場所に築かれる以前の鎌倉時代（13世紀代）には約800m北東の正傳寺西側の台地小字「古城」にあったと伝えられており、田原氏もそこに居住していたと考えられます。



写真3 北西側の堀



写真4 石組井戸



3. 千光寺跡（田原城主の菩提寺と墓地）

千光寺跡は大字上田原に所在し、田原城主田原対馬守の墓と伝わる五輪塔などが存在し、寺の存在を伺わせる小字「寺口」という丘陵上に立地していました。

平成6年度の発掘調査の結果、寺跡とそれに付随する墓地を確認しました。墓地では、25基以上の五輪塔群と常滑焼の大甕を埋納した総供養塔と考える6号墓（12世紀末～13世紀前葉）などの墓を確認しました（写真5）。特筆すべきものとして、3号墓の副葬品と考える龍泉窯製の青磁袴腰香炉（大阪府指定有形文化財）が完全な状態で出土しました（写真6）。3号墓は重厚な埋葬方法から田原城主の墓と考えています。



写真5 千光寺跡（南西から）

寺跡においては、東西に伸びる長さ15.5m・幅1.2mの2列の花崗岩の石列を確認し、その断面観察から版築工法の土塀の基礎であることが判明しました（第3図）。遺物としては陶磁器類や青銅製懸仏・大量の瓦等が出土しており、その中に『千光寺』と刻印された平瓦がありました。また、『明治六年西二月 廃寺取調書』に千光寺についての記載があり、文献上からも千光寺の存在が明らかとなりました。

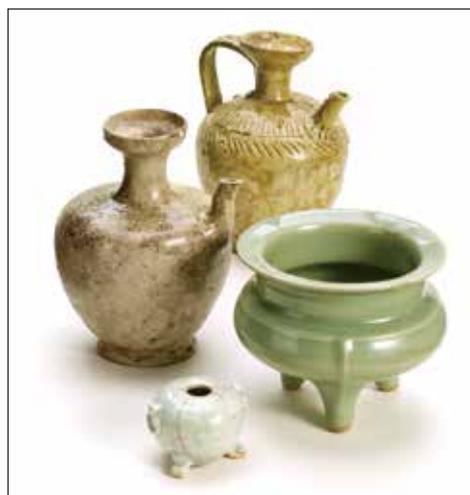


写真6 3号墓出土遺物

左の2点：瀬戸焼水注
手前：青白磁脚付小壺
右：青磁袴腰香炉

奈良文化財研究所撮影

以上、遺跡の内容や伝田原対馬守五輪塔が存在していたことから、この千光寺跡は、田原城主一族の菩提寺と墓地であると考えています。

キリシタン墓碑

平成13年度にその東側隣接を発掘調査したところ、土塀基礎石の続きを確認し寺域が生駒山系から東へ延びる丘陵の先端部まで広がっていることが判明しました。その最東端の土塀の内側（寺域内）において、一辺約63cm・深さ約21cmの隅丸方形の土坑を確認し、その中から文字面を上に向けて置いたような状態でキリシタン墓碑が出土しました（写真7）。その表面には、上半部中央にイエスを示す『IHS』の一部と考える『H』の文字とその横線上にゴルゴダの丘を表現していると考えられる『()』、その上部に十字架が刻まれており、下半部には『天正九年 辛巳』・『礼幡』・『八月七日』と刻まれていることから、天

正9年(1581)8月7日に亡くなった『キリシタン礼幡(レイマン)』の墓碑であることがわかりました。レイマンについては、宣教師の1574年の書簡に「三ヶ殿の一元老 Gennro はキリシタンになった。彼は Tauora (田原) の城主で、その改宗は大いにキリシタンの喜びとなり、之が為にその家臣がキリシタンになることが期待されるに至った。—後略—」、1575年の書簡に「聖週と復活祭は三ヶ(三箇)で盛大に催され、甲賀、若江、田原、堺、およびfn・・・(解読不能)のキリシタン三百名が集まった。—中略—都に至り、オルガンティーノとともに信長から親切に迎えられた。池田丹後守、三ヶマンショ、結城ジョアン、田原レイマン、その他河内のキリシタン武士も信長に挨拶に赴いた。—後略—」と記されています。このことから1574年(天正2年)に「田原の城主」がキリシタンに改宗し、1575年には「田原レイマン」が織田信長に会っていることがわかります。

発掘調査の結果や書簡の内容から墓碑の人物は、『田原城主田原礼幡』であると考えています。

なおこの墓碑は現在全国で確認されているキリシタン墓碑で最古のものです。



写真7 田原礼幡キリシタン墓碑
(大阪府指定有形文化財)



参考文献

山口 博編『四條畷市史』第一巻(1972年)

四條畷市史編さん委員会編『四條畷市史』第五巻(考古編)(2016年)

北田原城跡の発掘調査成果

江浦 洋（公益財団法人元興寺文化財研究所）

はじめに

北田原城跡は生駒市北西部の北田原町の標高約 196 m の丘陵上に所在しています。

近接して伊賀街道や清滝街道、磐船街道が走り、河内や山城の両国境からも近く、まさに交通の要衝に立地しています（図1）。

周辺には、南西 1.7km に田原城跡（四條畷市）、北東 3.1km に高山城跡（生駒市）、西 4.7 km に飯盛城跡（四條畷市・大東市）があります。天野川を挟んで相対する最も近い田原城は現況の地形をみる限りにおいては、お互いが見通せていた可能性が高いものと考えられます（図2）。

北田原城跡は城郭遺構の残りがよく、城郭研究者には一目置かれる存在でしたが、発掘調査は行われず、帰属年代などの実態がよくわかっていませんでした。

今回、鉄塔の建替えに伴う発掘調査で石積を検出するなど重要な成果をあげることとなりました。今回の調査を契機に北田原城跡は歴史の表舞台に躍り出ることとなりました。

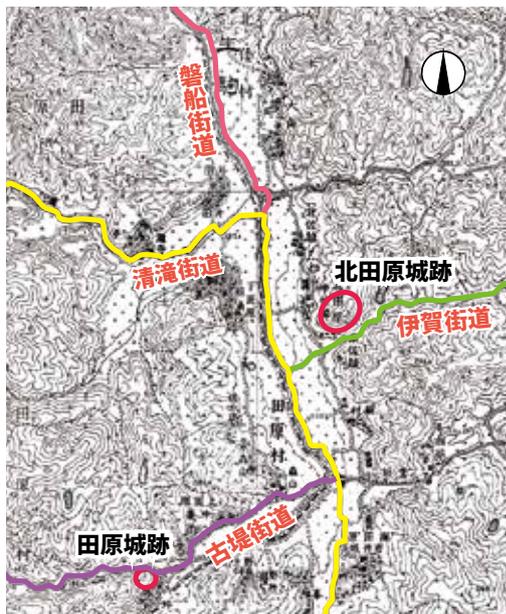


図1 北田原城跡と主要な街道
(大日本帝国陸地測量部 明治41年測量 1/20000「高山」・「西大寺」・「星田」・「生駒山」に加筆)



図2 北田原城跡と田原城跡の位置と視界
(カシミール3Dに加筆)

1. 調査の概要

北田原城跡に関してはすでに多くの城郭研究者によって縄張り図が作成されて公開されていますが、曲輪の名称に関しては必ずしも一様ではありません。したがって、今回の調査では現況地形の測量と発掘調査によって明らかとなった様相を踏まえて、今回の調査エリアの曲輪に名称をあたえました（図4・5）。

曲輪Ⅰ 標高196.0 mの最高所で最も大きな曲輪。曲輪の規模は東西約23 m、南北約21 mで南東側にやや傾斜をもった舌状の突出部分があります。北側の曲輪群の中では最高所に位置し、規模も大きいことから主郭であると考えられるものです。

曲輪Ⅱ 曲輪Ⅰの南東側に位置する東西約11 m、南北約13 mの曲輪。標高は194.0 mで

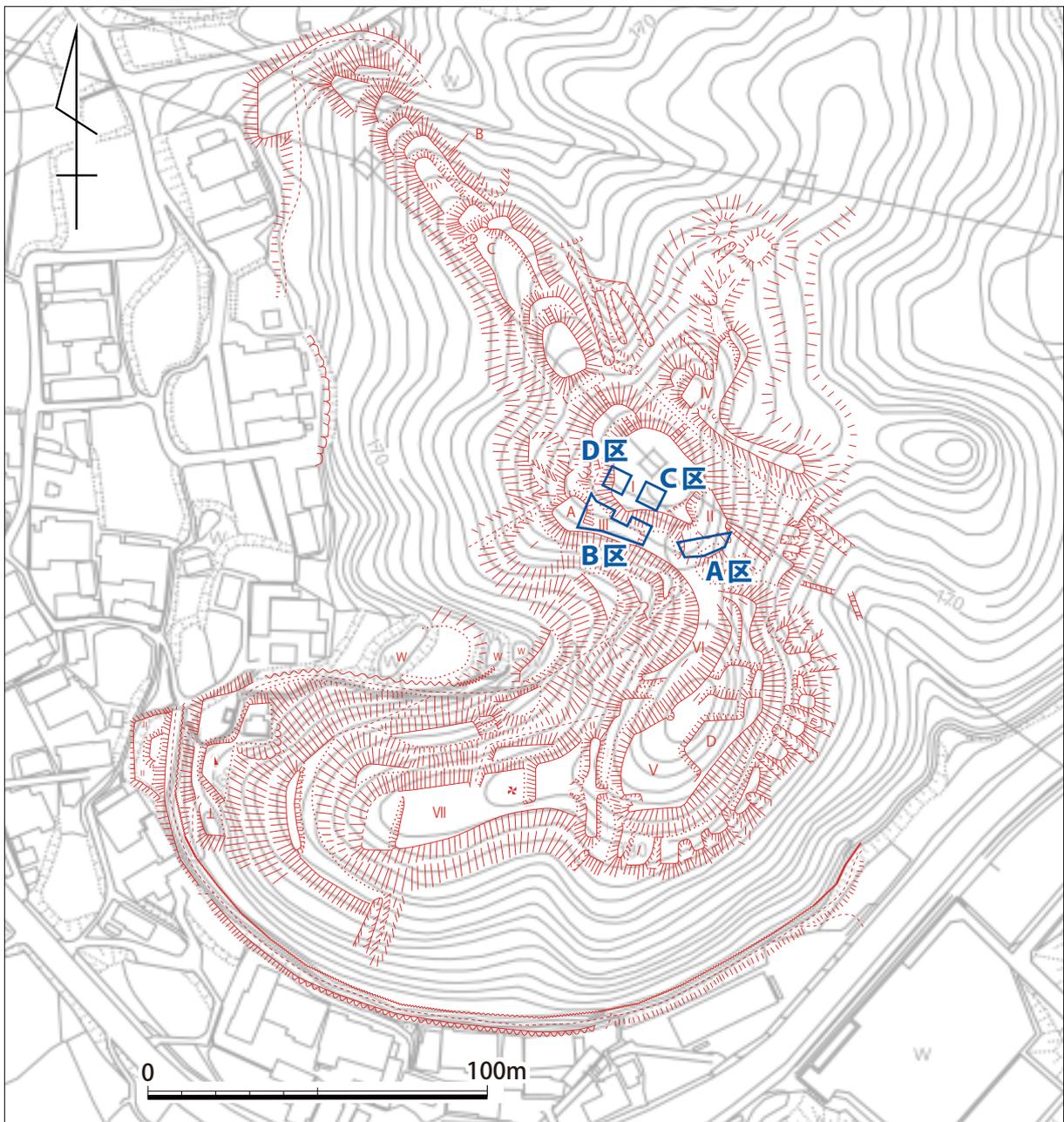


図3 北田原城跡の縄張り図（吉澤雅嘉 2017）と調査区

〔縄張り図は吉澤雅嘉氏作成図（『北田原城』【図解】近畿の城郭Ⅳ』2017 戎光祥出版）をトレースして生駒市地理情報白地図に投影〕

曲輪 I との比高差は約 2 m です。

曲輪 III 曲輪 I の南東で検出した曲輪 III。帯曲輪で、標高は 189.5 m、曲輪 I との比高差は約 6.5 m を測ります。

曲輪 IV・V 曲輪 II の南側で検出した小規模な曲輪を「曲輪 IV」としました。標高は 191.0 m です。そのほか、曲輪 I の北西の平坦面を「曲輪 V」としました。現況での標高は曲輪 II と同様と 194.0 m です。

櫓台 A 曲輪 III 西側の独立した方形の高まりを櫓台 A としました。上部の平坦面は台形状を呈し、その規模は約 8 × 7 m を測ります。曲輪 I との間は堀切となり、底部は幅 1.1m で平坦であり、通路としての機能を有していたものと考えられます。

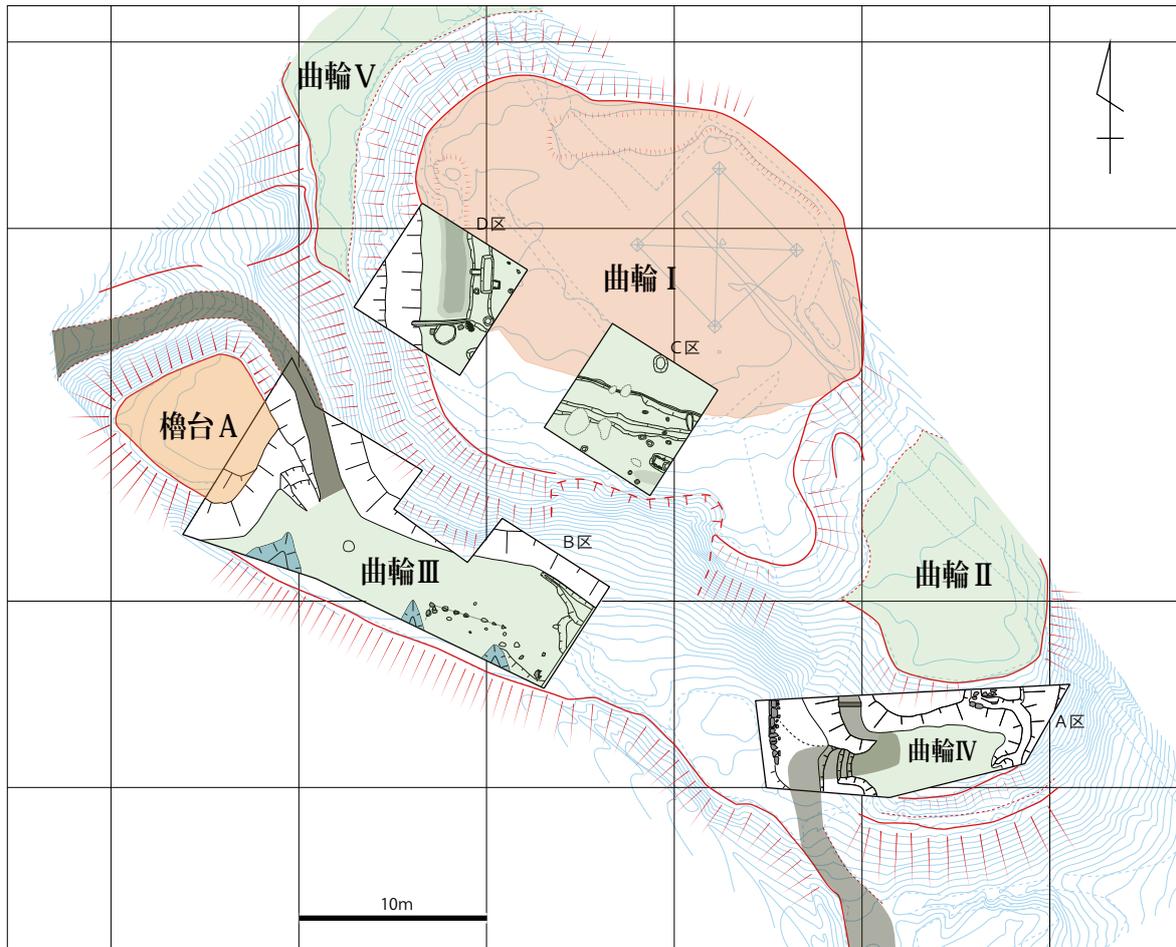


図4 今回の調査地と曲輪と道

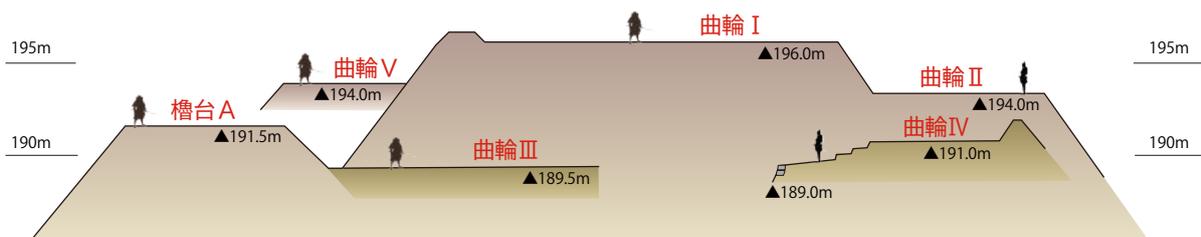


図5 各曲輪の断面模式図

(曲輪 II と曲輪 V は発掘調査を行っておらず、現況での高さを示しています。実際の高さはもう少し低くなる可能性があります。)

A区

A区では石積（石垣）、階段状遺構、切岸、平坦面などを検出しています。

石積 050 は曲輪 I とした主郭と南側に展開する曲輪群につながる主要な通路と想定される場所に造られています。地山は南側に向かって高くなっており、南で段数が減っていますが、これは造営当初の景観を保っているものと考えられます。

この場所は築城前には谷が入り込んでいた場所と考えられ、盛土と石積による護岸で曲輪と通路が整備されたことがわかります。



図6 石積 050 オルソ画像

オルソ画像は写真をゆがみのない画像に変換（正射投影）したものです。



写真1 石積 050（北西から）

地山は南から北に向かって緩やかに傾斜し、南側では岩盤を削り出して段差を造り出しています。加工石材を転用しており、方形の整正な石材は石塔の基壇石の転用であると考えられます。板状の加工石材も用いられており、そのうちの1点は石仏であることを確認しています。



写真2 階段状遺構 055 と石積 045（南から）

A区北東で検出した階段状の遺構。石積 045 は4個の石を積んで法面を保護しており、ステップとなる平坦面を確保するためのものと考えられます。



写真3 石積 050 に転用された石仏（西から）

石積 050 に転用された石仏は高さ約 57 cm、幅約 37 cm を測ります。仏像は頭部に地髪と肉髻が確認でき、右手を上、左手を下にしていることから如来形立像であることが確認できます。

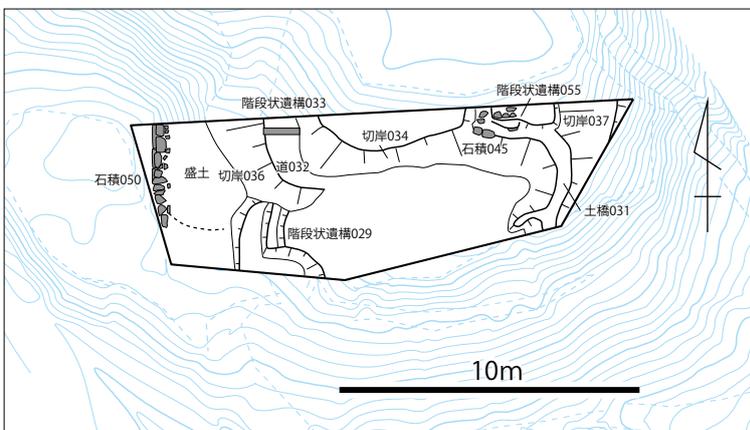


図7 A区平面略図



写真4 階段状遺構 033（南東から）
地山を削り込んで水平に転用石を設置し、背面は盛土で平坦面を造成しています。曲輪IVから続く道に直交することから、階段状の施設であると考えられます。



写真5 台付の皿
(A区出土)

春日大社(奈良市)で中世以降、祭祀に用いられている「ごんばい」と呼ばれる土器に似ている、飯盛城跡からも同じ形の土器が出土しています。皿の部分には二つの孔があげられています。



写真6 B区全景(南東から)

B区では礎石列、竪堀、ピット、土坑、切岸、堀切、斜路、平坦面などを検出しています。



北側は地山を急峻に成形し(切岸72)、その下方は平坦面となって帯曲輪(曲輪Ⅲ)が造成されています。調査区南東では礎石列070を検出しています。東西に直列する礎石列はいずれも北側に面を揃えており、上部構造は不明ながらも、北側に面をもつ施設であったものと考えられます。また、今回の調査で注目される遺構は調査区南端で検出された畝状空堀群です。

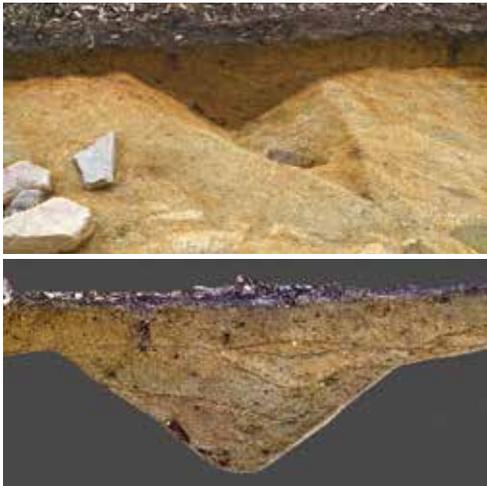


写真7 竪堀041(北東から)

断面形状は「薬研堀」と呼ばれる整正な逆三角形をしています。今回の調査では同じような竪堀が並んで見つかっています。



写真8 礎石列070(北西から)

礎石はいずれも北側に面をもち、地山を掘り込んで上面の高さを調整しています。個々に柱を立てるには間隔が狭く、土台となる材木を据えていた可能性があります。



写真9 切岸072(南東から)

曲輪Ⅰ南側では土の地山を削り出して「切岸」と呼ばれる斜面を作り出しています。切岸法面の傾斜の最も急な部分は63°を測ります。

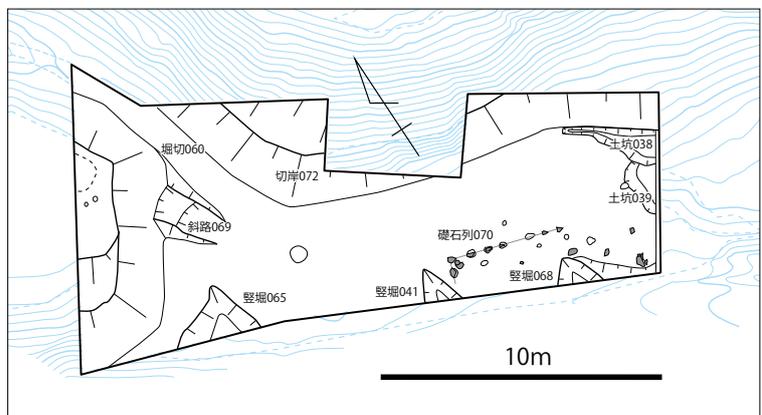


図8 B区平面略図



C区では溝・土坑・ピット・石組遺構などを検出しています。

石組遺構 010 はコの字状に石が配置され、下層に炭層が厚く堆積、石材は熱を受けて赤く変色しています。

溝のうち、SD003としたものは、C区の南側約5mで生じた「地すべり」の「後背亀裂（地面のひび割れ）」です。下層確認トレンチでは、この「後背亀裂」と盛土造成の際に行なわれた地山の法面を加工した上端ラインが対応することを確認、この地すべりは「曲輪Ⅰ」の造成時に行なわれた盛土に起因していることが明らかとなりました。

北田原城築城段階において、この部分には南から谷が入り込んでおり、当該箇所は盛土による造成が必要であったと考えられます。確認した部分では、厚さは約1.8mにも及ぶ盛土による整地作業が行われていて、築城時に飯盛城と同様に大規模な土木工事による曲輪の造成が行われていたことが明らかとなりました。

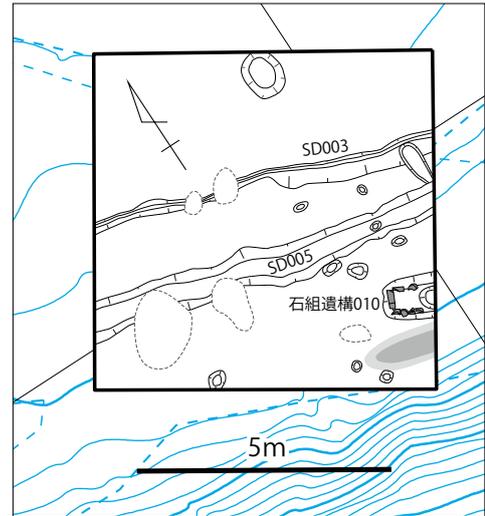


図9 C区平面略図



写真10 C区全景（東から）

SD005はD区のSD015同様に曲輪内の排水目的の溝であると考えられます。



写真11 石組遺構 010（東から）

石材は熱を受けて赤く変色し、下層には炭が厚く堆積していました。ここから出土した土師器皿は少し新しい様相を呈しており、城廃絶後の遺構である可能性も考えられます。



写真12 祥符通寶

1009年初鑄の宋銭。盛土層から出土。地鎮に用いられた可能性もあります。

写真13 盛土による整地痕跡（南東から）

主郭と考えられる曲輪Ⅰの南側では最大1.8mの盛土による大規模な土木工事が行われており、盛土層からは銅銭が出土しました（写真12）。



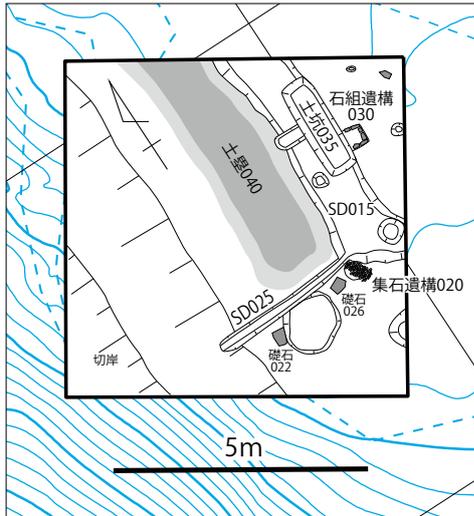


図 10 D区平面略図

D区では南北方向の土塁 040 を検出、これより西側は「切岸」となり、急峻な斜面になっています。調査区南側では土塁部分を横断する溝 SD025 を検出、その南側では礎石列も検出しています。SD025 からは土管が出土しており、この溝は土塁の下に造られた排水用の暗渠であったと考えられます。



このほか、径 3 cm 前後の円礫がまとまって出土した集石遺構 020、石材を方形に並べた石組遺構 030 などが見つかっています。

土塁の内側の溝 SD015 などからは完形の土師器皿や銅製品、鉄製品のほか、木炭などがまとまって出土しています。



写真 14 D区南東の遺構（東から）

溝（SD025）は土塁の内側に溜まった水を主郭である曲輪 I から排水するための溝であったと考えられます。溝の幅は出土した土管の復元直径とぴったり一致しています。最終的に北田原城が徹底的に破却されていることを示唆しています。



写真 15 土管（SD025 出土）

同じような土管を用いた暗渠は古市城跡（奈良市）でも見つかっています（奈良市 1981『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和 55 年度』）。



写真 17 溝 SD015 遺物出土状況（東から）

完全な形の土師器皿のほか、木炭・銅製品・鉄製品が連なって出土しました。一度に捨てたものと考えられます。



写真 16 石組遺構 030（西から）

コの字状に石を並べ、その内側に小さめの石を詰め込んでいました。大坂城跡でも似通った遺構が検出されており、排水枡であった可能性が考えられます。



写真 18 漆塗り銅製品（SD015 出土）

断面長方形の中空の青銅製品に布貼りをし、黒漆を塗って丁寧に仕上げられています。現段階では用途を明らかにできていません。

2. 北田原城と坂上氏

北田原城に関する史料は多くはありません。これは発掘調査で得られた同城の年代幅が短いこととも呼応しているように思えます。

北田原城と同時代の一次史料としては『多聞院日記』の記述があるのみです。これによると、永禄10(1567)年9月22日、「田原之坂上」氏が松永久秀に再び寝返り、松永久秀は多聞城から500人ほどの援軍を飯盛城に入城させています。この時期、飯盛城をめぐる三好三人衆と松永久秀の間で目まぐるしい交代劇があり、同年8月25日に飯盛城の松山与兵衛(守勝)が松永方に寝返っていることが記されています。『多聞院日記』には坂上氏に関するこれ以外の記述はありませんが、「又裏帰了」という記述から、両者の攻防の狭間で揺れ動く坂上氏の姿が浮かびあがります。

ただ、『多聞院日記』には「田原之坂上」と記されるのみで城名は記されていません。しかし、享保21(1736)年の『大和志』には「北田原村ノ城ハ坂ノ上丹後守」と記され、安永3(1774)年の「十一ヶ村村鑑」にも北田原村に「坂上丹後守殿城跡」があったことが記されています。北田原村の城と坂上氏を結びつける伝承が残っていたようです。

また、一次史料ではない家系図や縁起などに関しては、その取扱いについては慎重を期す必要がありますが、「鷹山氏系図写」や「鷹山家略譜」、「大和国添下郡岩屋山岩蔵寺記」には坂上氏に関してより詳しい記述がみられます。これらの史料については信じるとすればという前提ではありますが、総合すると以下のような流れになります。

河内との国境にあった「田原ノ城主」であった坂上尊忠(後に「清兵衛尉又丹波守」)は鷹山弘頼(1517～1553年)の娘を妻とします。坂上尊忠は父である肥後守の代から田原の城主でした。永禄10(1567)年9月22日、坂上氏は再び三好方から松永方へ寝返ります。天正7(1579)年には北田原城の南方

にあった岩蔵寺の本堂外陣を再建します。天正13(1585)年には城を離れ牢人となります。慶長19(1614)年の大坂夏の陣では豊臣方として道明寺口の戦いで秀頼の乳兄弟である結城権佐の先陣となりますが、翌元和元(1615)年、5月5日、鉄炮で胴を撃ち抜かれ、大坂城に戻るが、翌朝、命を落としたとされます。法名は「月山宗清」。

今回の調査で出土した遺物からみた北田原城の年代観が16世紀前半から中頃で比較的短いこと、さらには16世紀末葉までは下らないことなどを考えると、文献史料による坂上氏の動向とは多くの点で整合性があるといえそうです。

①『多聞院日記』永禄十年(一五六七年)

田原之坂上松少へ又裏帰了云々、即生馬谷今朝少々焼煙見了、多聞山より飯盛城へ人数五百計今晚被入了云々

『多聞院日記』永禄十年九月二十二日条(英俊著、辻善之助編)

『多聞院日記』第2巻『三教書院』一九三五年、三四頁

②『大和志』享保二十一年(一七三六年)

山田城在二城村一在原氏所レ抛 又有二郡境一北田原村城ハ坂ノ上丹後守者所レ抛(後略)

『大和志』(『五畿内志』)並河永享保二十一年(一七三六)

『五畿内志』中巻『日本古典全集』第三期 日本古典全集刊行会
一九三〇年、二五八頁

飯盛城の支城群

天野 忠幸（天理大学教授）

はじめに

飯盛城周辺は、南北朝時代の四條畷の戦いから、江戸時代前期の大坂夏の陣まで、軍事的要衝として、たびたび軍勢の通り道や合戦の舞台となりました。大阪平野や大阪湾だけでなく、京都盆地まで見渡せる生駒山地北西部という立地に加え、京都から高野山まで河内を南北に縦貫する東高野街道は、軍勢を自由自在に動かせる利点がありました。その上、深野池と新開池という湖が堀の役割を果たし、飯盛城を大軍で取り囲むことができないなど、好条件が重なっていたのです。

また河内北部、つまり淀川左岸にして大和川下流という飯盛城周辺の河内内海世界の特性も考えてみましょう。水害がひとたび起きると大惨事になりますが、平時は重い物資を運搬するのに有利な水上交通網が縦横に広がっていることを意味します。そして、近隣には首都京都と国際貿易都市堺が存在していました。これら大消費地の後背地として、河内北部は重要な意味を持てきます。京都に本拠地を置く室町幕府は、足利将軍家の御料所として、河内十七箇所や河内八箇所を設定し、将軍に近い寺社に管理を委ねようとしてきました。淀川右岸の摂津守護である細川管領家も、こうした巨大荘園を手中にしたいという野望を持っていました。一方、河内守護の畠山管領家は、堺や住吉、天王寺など摂津關郡（現在の大阪市）を虎視眈々と狙っています。

このように有力な武家が三すくみとなり、それぞれの勢力が入り混じる不安定な政治状況の中、淀川と大和川の合流点である大坂には、本願寺教団が御坊を設置し、日本最大の寺内町へと発展していきました。また、内海世界の最奥にある飯盛城も摂津・河内・和泉で最大級の山城へと進化を遂げます。そうした飯盛城の前提には、様々な軍勢が陣取った野崎の存在がありました。飯盛城を築いた木沢長政は、信貴山城も築城し、国境の城から河内・大和の両国に睨みを利かします。三好長慶が飯盛城に入ると、三箇氏や結城氏、田原氏など周辺の城主たちが結集して仕えました。こうした飯盛城とそれを取り巻く支城群に着目したいと思います。

1. 畠山義就・義豊と野崎城

飯盛・野崎地域がその名を知られるようになったのは、南北朝時代の四條畷の戦いです。正平2年（貞和3年、1347）8月に楠木正成の長男正行が挙兵すると、各地で足利方を破りました。このため、足利尊氏は執事の高師直に出陣を命じます。『醍醐地蔵院日記』貞和4年（1348）正月2日条に「執事立八幡、懸于河内路、進発東条城云々、但令逗留野崎辺云々」とあるように、師直は東高野街道を南下し野崎に陣取ったのでした。その後、飯盛山も占領します。大軍を率いる師直は、わざと多勢の用兵に不利な飯盛山と深野池に挟ま

れた狭隘な野崎に、少数精鋭をもってなる正行を誘い込み、正面と側面から挟み撃ちにして、讃良郡の北四條で討ち取りました。

その後、しばらく飯盛山麓では大きな戦いはありませんでしたが、この地が再び重視されるようになるのが、応仁・文明の乱です。河内では、東軍の畠山政長と西軍の畠山義就が激突しました。特に政長は大和の筒井氏（大和郡山市）、義就は同じく越智氏（高取町）・古市氏（奈良市）・鷹山氏（生駒市）を従えており、多くの軍勢が河内と大和を行き来することになります。文明2年（1470）7月には畠山義就被官の遊佐氏が野崎に陣取り、翌年6月には遊佐五郎が野崎より出撃して、客坊（東大阪市）を落としています。7月には逆に政長方の筒井氏らが河内に討ち入り、義就方の遊佐氏が籠る三箇を攻撃しました。文明5年11月にも筒井氏は野崎を攻めているので、野崎は義就方の一大拠点となっていたようです。

応仁・文明の乱は文明9年（1477）9月に、西軍が形式上降伏する形で終結します。しかし、畠山義就はそれを無視して河内に下向し、実力で占領してしまいました。同月27日、義就は野崎に本陣を置きます。この時、往生院城（東大阪市）や客坊城も義就方の拠点となっているのは、義就が越智氏ら大和衆に支えられていたためでしょう。

その後も、河内奪還を図る政長と義就の戦いは続きますが、文明15年（1483）8月、義就は野崎と犬田城（枚方市）を攻めているので、どこかの段階で、野崎は政長に奪われていたようです。明応2年（1493）に將軍足利義植・畠山政長と義就の子義豊が戦った正覚寺合戦の際に作成された「河内御陣図」（『福智院家文書』）は、それまでの両畠山氏の戦いも盛り込まれていますが、野崎も描かれており、軍事的要衝と広く認識されていたことがうかがえます。

ようやく野崎が「城」と記述されるようになるのは、畠山義豊の時代になってからです。『尋尊大僧正記』明応7年（1498）8月9日条に「河内野崎城被責之、不成事而引退了」とあるのが初見です。この時、義豊は政長の子尚順の守る野崎城を攻めましたが撃退されました。明応8年（1499）正月10日に義豊は野崎城を攻め落としますが、その月末に戦に敗れ自害してしまいました。同年10月4日に、義豊の子義英が畠山尚順の野崎城に攻めますが（『後法興院政家記』）、落とすことはできませんでした。これ以後、野崎が直接戦場となった史料はありません。おそらく、より高所の飯盛城に城郭としての機能が移ったのでしょう。

両畠山氏より重視された野崎でしたが、どのような要害だったのかはわかりません。当初は、慈眼寺に間借りするような形だったのではないのでしょうか。寺院と城郭の建造物はよく似ているからです。往生院城や客坊城もそうした寺社の建造物が利用されたと思われます。またこれらが地域の聖地であり、そこを守護することで地域住民を動員することや、大和との連絡が重視されたようです。

2. 木沢長政と飯盛城の支城群

飯盛城は享禄3年（1530）以前に、木沢長政によって築かれた山城です。木沢氏は元々、

義就流畠山氏の奉行人の家格でしたが、畠山管領家や細川管領家が分裂して争う中で、畠山義堯（義就流）・細川高国（高国流）・細川晴元（澄元流）と渡り歩き、高屋城（羽曳野市）を代々本拠地とする畠山管領家の影響力が小さい河内北部で割拠しました。

長政は享禄4年（1531）から翌年にかけて、畠山義堯や三好元長の飯盛城攻めを細川晴元や一向一揆の援助で耐え抜くと、逆に大和や山城南部に勢力を拡大していきます。そうした中で、天文2年（1533）12月には、信貴山に陣を置き居住するようになりました（『兼右卿記』）。長政は信貴山より、本願寺に敗れた細川晴元に対して、京都か飯盛城に逃れるよう勧めてもいます。また同年には、飯盛城に義堯の弟在氏や父の木沢浮泛を置きました（『蓮成院記録』）。そして、『天文日記』天文5年（1536）6月26日条に「信貴山之上ニ城をこしらへ候て、はや移候」とあるように、長政は信貴山城を本格的に築き居城としています。「和州平群郡信貴山城跡之図」（『大工頭中井家関係資料』）によると、「書付無之かまへ（構）、何れも木沢殿取立之時之古屋敷ニ而御座候」とあるので、後に城主となる松永久秀の時よりも、長政段階方が曲輪は多かったようです。信貴山城が本城で、飯盛城が支城という関係になりますが、畠山在氏は「飯盛御屋形様」と呼ばれるので、飯盛城は特別な支城ということになるかも知れません。

その後も長政は、金剛山地に二上山城（葛城市、太子町）、大和と山城・近江・伊賀の境に笠置城（笠置町）と複数の城郭を整備していきました。新興勢力の長政は、敢えて国境地帯に拠点を置くことで、平野部に拠点を置く既存の勢力との対立をやわらげ、国境地域の土豪らを把握していきます。

また、長政の城郭政策には特徴がありました。飯盛城の山上の御体塚郭には大きな花崗岩の露頭がありますが、このような巨石は磐座として信仰の対象となったため、そうした聖域を城内に取り込んだとされます。また飯盛城の西麓には、慈眼寺があることも忘れてはいけません。信貴山城も中腹の朝護孫子寺に加え、山頂の雄嶽にある露岩の上に、空鉢護法堂が設置されています。二上山は西麓に聖徳太子や推古天皇の墳墓を抱え、山上には葛木二上神社があるなど、祈雨や葛城修験など信仰の山でした。笠置城は、巨石に彫り込まれた摩崖仏の弥勒仏を本尊とする笠置寺に拠っています。長政の山城の選地は、寺社や自然崇拜の聖地を重視していたのです。

木沢長政は天文11年（1542）の太平寺の戦いで討死しますが、飯盛城の畠山在氏や木沢浮泛は翌年まで戦い抜きました。

3. 三好長慶と飯盛城の支城群

飯盛城はその後、交野郡出身と推測される安見宗房が城主となりますが、永禄3年（1560）に三好長慶が入城します。長慶と宗房の戦いでは、安見方は飯盛城から打って出て、大窪（八尾市）や堀溝（寝屋川市）で三好方を迎撃しました。野崎まで攻め込まれた様子はなく、宗房は交渉により飯盛城から堺に退去しています。飯盛城が軍事的に落城した訳ではないのです。

長慶は河内と大和を平定しますが、木沢長政とは異なり、飯盛城を居城とし、信貴山城は重臣の松永久秀に与えました。久秀は多聞山城（奈良市）を築城して居城とするので、信貴山城は飯盛城の支城ではなく、多聞山城の支城となります。

飯盛城の構造は、江戸時代に作成された『河内国飯盛旧城絵図』より、多少ながらもうかがい知ることができます。注目したいのは「三ヶ殿曲輪」です。つまり、深野池の小島に城を構え、船を大量に動員できる領主の三箇頼照サンチョが、長慶に仕え、飯盛城内に屋敷を持ち、一つの曲輪を任されていたのです。そして、頼照は永禄7年（1564）に飯盛城で洗礼を受けた約70名の一人となりました。

そうした河内キリシタンに、岡山（現在の忍ヶ丘）の城主である結城ジョアンやその伯父で後見人の結城弥平次ジョルジ、また結城左衛門尉アンタンや田原レイマンなどがいます。結城氏は將軍直臣の幕府奉公衆でしたが、三好長慶が將軍足利義輝を追放し首都京都を単独で支配するようになると、左衛門尉の父親にして弥平次の伯父である結城忠正が長慶に従うようになります。そうした結城氏の領地は、東高野街道と清滝街道が交わるあたりにありました。この地域には、キリスト教宣教師の史料に「砂の寺内」とあるように、浄土真宗が広がり、町場化が進んでいました。そうした場所に教会を建て、住民に布教していったのです。

また、田原レイマン（礼幡）は、フロイス『日本史』によると天正3年（1575）に主だった河内キリシタンと共に織田信長のもとへ挨拶に出向いたことや、千光寺跡で見つかった天正9年銘のキリシタン墓碑で有名です。レイマンも周辺の領主の動向を踏まえると、長慶に仕え、改宗したと考えられます。田原城は天野川沿いにあり、すぐ東側は現在の生駒市南田原町や俵口町に接しています。つまり河内と大和の国境にあり、その往還を守っていたのです。

こうして見ると、飯盛城の支城として、三箇城は深野池の水路を守り、岡山城は東高野街道と清滝街道に目を光らせ、田原城は大和との交通路を監視するという枠割を担っていたと言えるでしょう。

4. 松永久秀は慈眼寺を焼いたのか

永禄7年（1564）に三好長慶が飯盛城で死去すると、翌年末にはその家臣団は松永久秀方と三好三人衆方に分裂し争うようになりました。そうした戦いの中で、永禄8年（1565）に久秀が慈眼寺を焼いたとされてきました。それは本当でしょうか。

まず、『河内名所図会』「福聚山慈眼寺」によると、「寺説云、永禄八年、松永久秀志貴城に籠りて、近隣動乱の時、佛閣、兵燹に罹て灰燼となる。漸、本尊、實慶の寺記のみ遺れり。」とあります。しかし、永禄8年に久秀がいたのは多聞山城で、戦況も三好三人衆方が押さえる飯盛城を攻める余裕など全くありませんでした。

次いで鐘銘には、「永禄八年、三好之嬖臣松永弾正、弑將軍義輝公襲。此時、弊織田信長公、窺京兆、于是五畿騒怖、七道震驚、罹斯喪乱。我山仏閣僧坊、咸成灰燼、而大士之尊

像、儼然独存、慶長元和之間、有青嶺者、洞下之英衲也。」とあります。永禄8年（1565）に將軍義輝を討ったのは、三好義継と松永久秀の子久通であって、既に誤っているのですが、この義輝殺害事件を経て、織田信長が京都に進出し五畿七道で戦争が激しくなり、慈眼寺が焼失したとしています。つまり、信長による戦禍なのです。大坂本願寺合戦の最中の天正2年（1574）7月に三箇城、8月に飯盛下で本願寺方の一揆と織田方が戦っていますので（『細川家文書』）、この時に慈眼寺も焼失したのではないのでしょうか。

そうすると、永禄12年（1569）頃に三好義継が飯盛城より若江城（東大阪市）に居城を移し、飯盛城は廃城になったとされていますが、城郭としての機能はまだ残っており、三箇城と連携していたのかもしれませんが。

おわりに

飯盛城の前史として、畠山義就・義豊段階の野崎城から、木沢長政段階の信貴山城・二上山城・笠置城との共通性、そして、三好長慶段階の三箇城・岡山城・田原城の役割までを振り返ってきました。

義就・義豊段階の頃は絶対死守すべき唯一無二の拠点でもなく、河内と大和を繋ぐ連絡路の一つに過ぎなかったため、たびたび取ったり、取られたりという戦いが続きました。しかし、長政段階で河内北部の一大拠点へと発展し、難攻不落の要塞化します。ただ長政は河内では守護代遊佐長教との共同統治を志向し、大和への進出を政策の中心にするので、大和での軍事行動が容易な信貴山城を本城としていきます。そして、長慶段階では飯盛城直近の支城の領主が編成されていきます。長慶の視点は長政とは逆に河内へ向けられます。河内北部の水陸の交通路を掌握することが、最重要課題となっていたことがわかってきました。

参考文献

天野忠幸『室町幕府分裂と畿内近国の胎動』（吉川弘文館、2020年）

天野忠幸『三好一族』（中央公論新社、2021年）

天野忠幸「畠山氏の分裂と中河内の武士たち」（『新版八尾市史通史編Ⅰ』2023年）

天野忠幸編『摂津・河内・和泉の戦国史』（法律文化社、2024年）

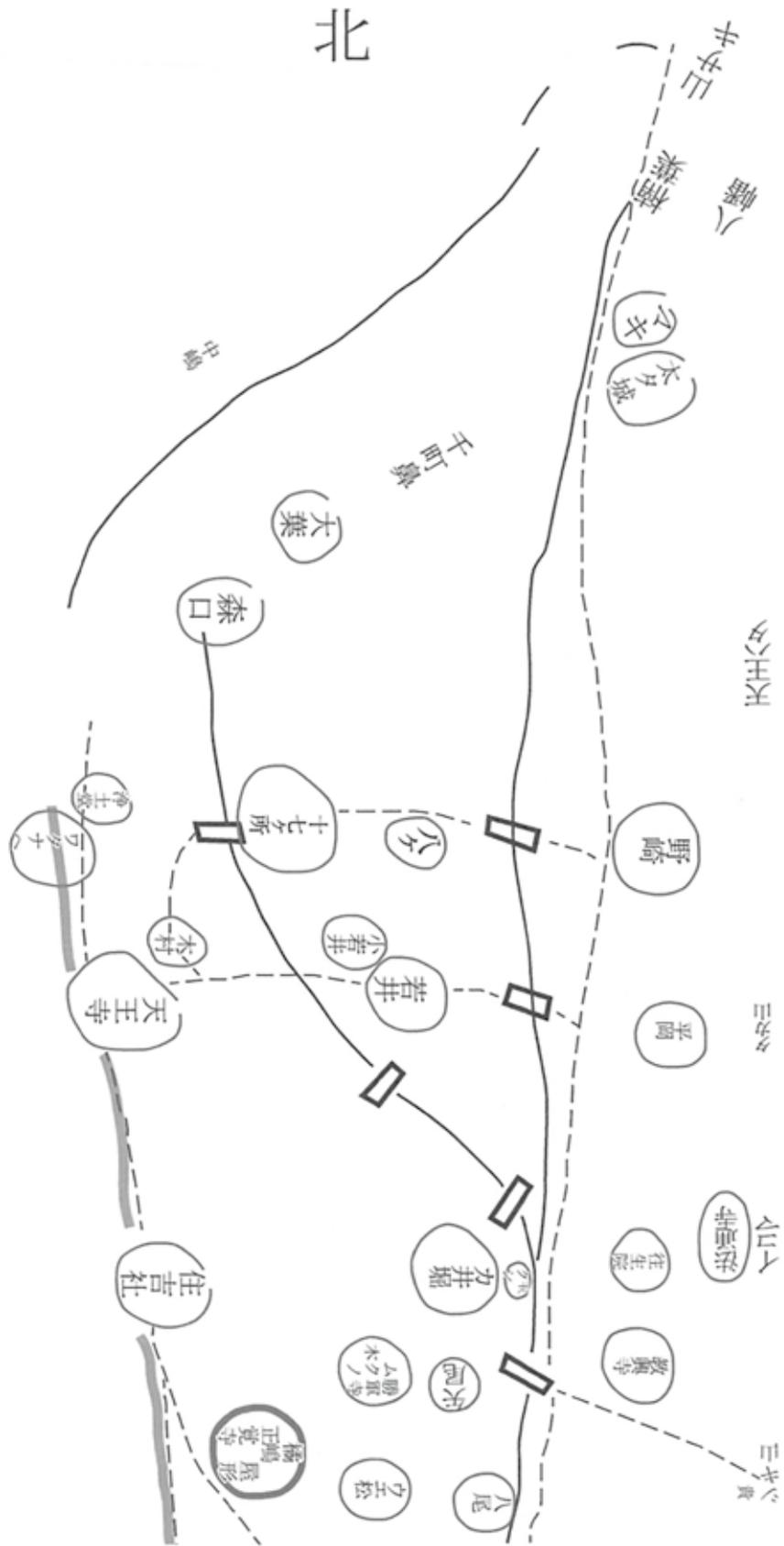
大東市教育委員会・四條畷市教育委員会編『飯盛城跡総合調査報告書』（2020年）

大東市教育委員会編『三好長慶と大東市の中世』（2022年）

中世学研究会編『城と聖地』（高志書院、2020年）

中西裕樹「木沢長政の城」（『史敏』8、2011年）

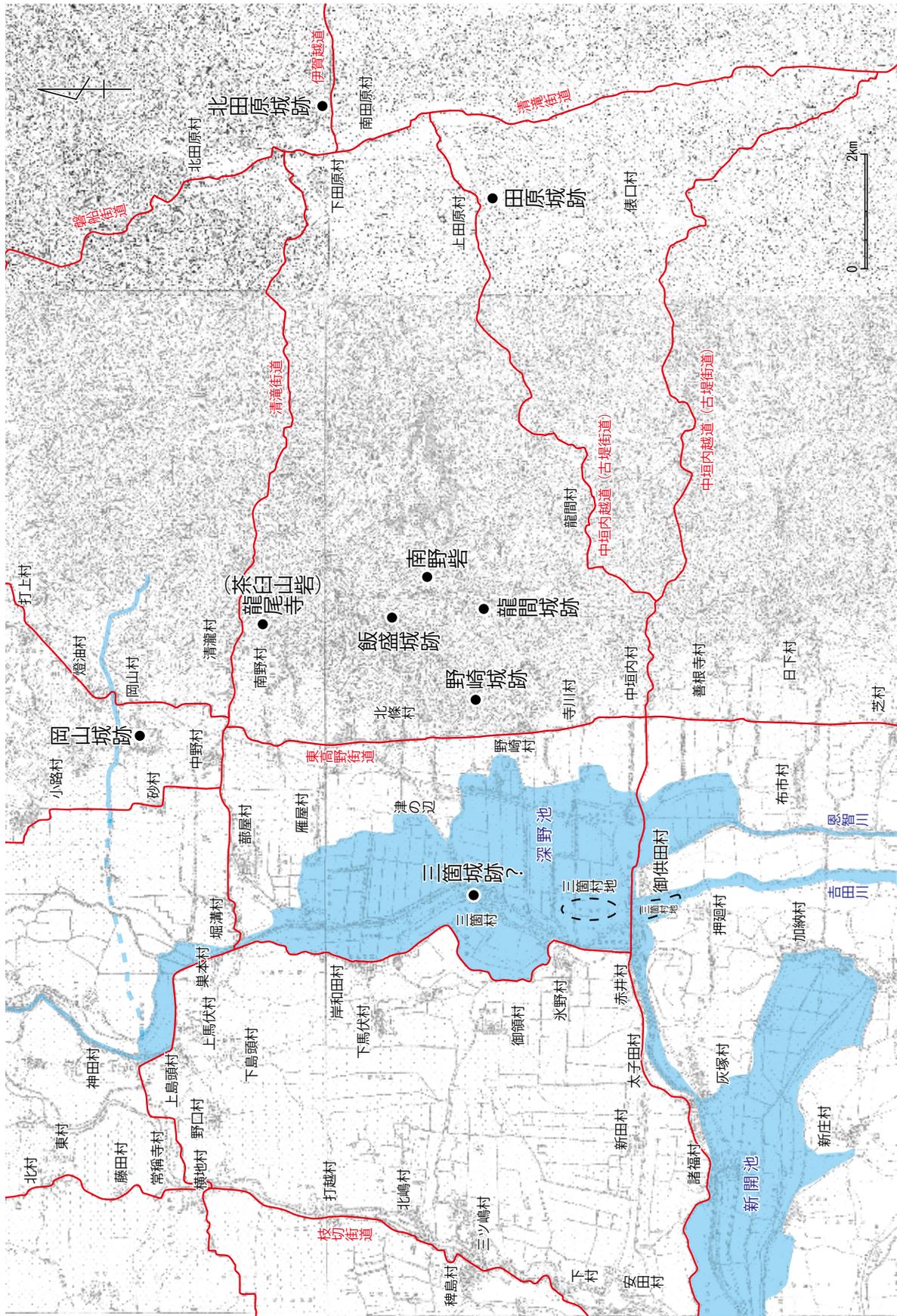
三原大史「『明応二年御陣図』からみた中世後期の河内国」（『都市文化研究』23、2021年）



「明応二年御陣図トレース図」【三原 2021】



「浅野文庫諸国古城之図 (砂・岡山御陣図)」



関連城郭と街道、旧深野池・新開池推定範囲
 大日本帝国陸地測量部仮製地形測量図 (明治 20 年) 枚方・田辺村・星田村・高山村・生駒山・西大寺村より作成



飯盛城跡赤色立体地図 (遺構加筆)


関連略年表


| 年 | 出来事 | 備考 |
|-----------------|---|---------|
| 1348 (貞和 4) | 高師直、東高野街道を南下し野崎に陣取り飯盛山を占拠する 師直と楠正行が讃良郡北四条（大東市北条）で激突、正行が打討ち取られる | 四條畷の合戦 |
| 1470 (文明 2) | 畠山義就被官 遊佐氏が野崎に陣取る | |
| 1471 (文明 3) | 遊佐五郎、野崎より出撃し客坊城（東大阪市）を落とす 畠山長政方の筒井氏、河内に攻め入り遊佐氏が籠る三箇城を攻撃 | 応仁・文明の乱 |
| 1473 (文明 5) | 筒井氏、野崎を攻める | |
| 1477 (文明 9) | 畠山義就、野崎に本陣を置く。 | |
| 1783 (文明 15) | 畠山義就、野崎と犬田城（枚方市）を攻める | |
| 1498 (明応 7) | 畠山義豊、政長の子である尚順が守る野崎城を攻める *野崎が「城」と記述されるようになる | |
| 1499 (明応 8) | 畠山義豊、野崎城を落とすが、戦に敗れて自害する 義豊の子、義英が畠山尚順の野崎城を攻めるも撃退される | |
| 1530 (享祿 3) | 木沢長政が飯盛城を築く | |
| 1531 (享祿 4) | 畠山義堯・三好元長が木沢長政の飯盛城を攻める | |
| 1233 (天文 2) | 木沢長政、信貴山に陣を置き居住する 飯盛城に父・木沢浮泛と畠山義堯の弟・畠山在氏を置く | |
| 1237 (天文 6) | 飯盛城の畠山在氏が守護として活動をはじめ、「飯盛御屋形様」と称される | |
| 1532 (天文 11) | 木沢長政、太平寺（柏原市）で三好長慶・細川晴元と結んだ遊佐長教と戦い討ち死に。信貴山城落城 畠山在氏・木沢浮泛ら飯盛城に籠城 | 太平寺の戦い |
| 1533 (天文 12) | 畠山在氏・木沢浮泛らが籠城する飯盛城、開城し何れも牢人となる 遊佐長教により交野郡出身の安見宗房が飯盛城に置かれる | |
| 1552 (天文 21) | 安見宗房は飯盛城内に座敷を設け、酒宴にことよせて対立する萱振賢継を誅殺 | |
| 1559 (永祿 2) | 三好長慶、飯盛城の安見宗房を度々攻める | |
| 1560 (永祿 3) | 三好長慶、交渉によって飯盛城から安見宗房を退去させる 長慶、飯盛城に入城する | |
| 1561 (永祿 4) | 三好長慶、飯盛城で飯盛千句を催す | |
| 1564 (永祿 7) | キリスト教宣教師ガスバル・ヴィレラ、ロレンソ了齋を飯盛城に派遣。キリスト教を三好氏の被官に布教。三好氏配下の 73 人がキリシタンとなる 三箇頼照、寺院を教会に改修 結城氏、領地の砂（四條畷市）に教会を建てる 三好長慶、弟の安宅冬康を飯盛城で殺害 長慶、飯盛城で死去 | |
| 1565 (永祿 8) | 正親町天皇、バテレン追放令を発する ガスバル・ヴィレラ、飯盛城に潜伏。飯盛城のキリシタンがイエズス会宣教師を保護する 三箇頼照、三好義継からキリスト教棄教を迫られ飯盛城を退去する 三好義継、飯盛城から高屋城に移る | |
| 1567 (永祿 10) | 坂上氏、松永久秀に寝返る。久秀、多聞城から 500 名の援軍を飯盛城に入城させる 三箇頼照、フロイスらに飯盛城に住居を構える前に屋敷があった小島を見せる | |
| 1568 (永祿 11) | 飯盛城の麓の三箇で復活祭が催され、三箇頼照が教会を建設した 三好義継・松永久秀が飯盛城に入城する | |
| 1569 (永祿 12) | 三好義継、居城を飯盛城から若江城（東大阪市）に移す | |
| 1574 (天正 2) | 田原城主がキリシタンとなる | |
| 1581 (天正 9) | 田原『礼幡』が死去 | |



北東上空より飯盛山を望む

クローズアップ飯盛城 2024 講演会

飯盛城を支えたお城を考える 飯盛城と関連城郭
—資料集—

開催日 令和6年10月12日
会場 大東市立市民会館2階 キラリエホール

令和6年10月12日第1刷発行

発行 大東市産業・文化部生涯学習課（編集）
〒574-0076 大東市曙町4番6号
TEL 072-870-9105 FAX 072-870-9687

四條畷市教育委員会社会教育部文化財課
〒575-8501 四條畷市中野本町1番1号
TEL 072-877-2121 FAX 072-877-8300

印刷・製本 喜光堂印刷株式会社
〒579-8014 東大阪市石切町4丁目11番17号
TEL 072-984-2881 FAX 072-984-2882

大東市印刷物番号

6 - 49